慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	ジェファスンとフランス重農主義 : トマス・ジェファスンの経済思想(2)
Sub Title	Jefferson and physiocracy : Thomas Jefferson's economic thought (2)
Author	白井, 厚
Publisher	慶應義塾経済学会
Publication year	1978
Jtitle	三田学会雑誌 (Keio journal of economics). Vol.71, No.5 (1978. 10) ,p.776(148)- 788(160)
JaLC DOI	10.14991/001.19781001-0148
Abstract	
Notes	遊部久蔵教授追悼特集号 論説
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00234610-19781001-0148

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

ジェファスンとフランス重農主義[1]

——トマス・ジェファスンの経済思想（2）——

白井　厚

1　ジェファスンとフランス
2　ジェファスンとフランス経済学
3　チュルゴとの関係
4　デュポン・ドゥ・ヌムールとの関係

注（1）本稿は，本誌69巻8号の拙稿「トマス・ジェファスンの経済思想(1)」の続編をなす。なお本論の内容は，1977年6月の経済学史学会関東部会（中央大学）において報告された。その時の討論者一橋大学津田内匠教授および他の参会者の有益な討論に感謝する。

ジェファスンの経済思想について，筆者は別に1976年9月慶大経済学会において「ジェファスンとスミス」という報告を，11月の経済学史学会第40回全国大会(九州大学)において「トマス・ジェファスンの経済思想とアダム・スミス」という報告を，1977年4月アメリカ学会第11回年次大会（天理大学）において「トマス・ジェファスンとアダム・スミス」という報告を行った（『経済学史学会年報』15号，1977年。『アメリカ研究』12号，1978年)。

ジェファスンの経済思想についての研究文献は少ない。その主なものを年代順に挙げると，

Beard, Charles A. *Economic Origins of Jeffersonian Democracy*. N. Y.: The Macmillan Co., 1915.

Vical, Joseph Clifton. *Comparative Study of the Economic Opinions of John Adams, Thomas Jefferson, and James Madison*. M. A., Duke Univ., 1937.

Dorfman, Joseph. "The Economic Philosophy of Thomas Jefferson." *Political Science Quarterly*, LV (March, 1940), 98-121.

これと似た内容は，*The Economic Mind in American Civilization*, 5 vols. N. Y.: The Viking Press, 1946-59, 433-47.

Spengler, Joseph J. "The Political Economy of Jefferson, Madison, and Adams." in David Kelley Jackson, ed., *American Studies in Honor of William Kenneth Boyd*. Durham: Duke Univ. Press, 1940.

Weir, Le Roy Moffat. *Contemporary Thought on Economic Aspects of National Problems in the United States, 1780-1800. A Study of the Views of Franklin, Jefferson, Madison and the Pamphleteers*. Diss. Michigan, 1942.

Grampp, William D. "A Re-examination of Jeffersonian Economics," *The Southern Economic Journal*, XII (Jan. 1946), 263-82. これは次の書に再録されている。*Thomas Jefferson: A Profile*. Ed. M. D. Peterson. N. Y.: Hill and Wang, 1967.

Griswold, A. Whitney. "The Agrarian Democracy of Thomas Jefferson." *The American Political Science Review*, XL (Aug. 1946), 657-81. これは次の書に再録されている。*Farming and Democracy*. N. Y.: Harcourt, Brace and Co., 1948.

Cragan, Thomas M. *Thomas Jefferson's Early Attitudes Toward Manufacturing, Agriculture, and Commerce*. Diss. Univ. of Tennessee, 1965.

Adams, Hewitt D. "A Note on Jefferson's Knowledge of Economics." *The Virginia Magazine of History and Biography*, LXXV (Jan. 1969), 69-74.

Benson, C. Randolph. *Thomas Jefferson as Social Scientist*. Cranbury, New Jersey: Associated University Presses, 1971.

Ellis, Richard E. "The Political Economy of Thomas Jefferson." *Thomas Jefferson, the Man, His World, His Influence*. Ed. Lally Weymouth. N. Y.: G. P. Putnam's Sons, 1973.

1　ジェファスンとフランス

ジェファスンとフランスの間には，特に密接な関係がある。

先ず成長期において，彼はイギリス本国の書物と並んでフランスの書にも親しんでいたようだ。[(2)] 50年代に編集された *Commonplace Book*[(3)] や *Literary Bible* を見ると，モンテスキューを学んでいたことがわかり，後年まで含めると，ヴォルテール，ルソー[(4)]，コンドルセ，ケネ，ミラボー，マブリ，ディドロ，エルヴェシユス，デカルト，ダラレベール，カバニなど，その影響を速断することはできないにしても，フランス啓蒙思想は，ギリシャ・ローマの古典，本国イギリスの思想と並んで，彼の知性の重要な一源泉であり，少なくとも彼の思想を支え強化するものだったと言えるだろう。

また独立戦争期には，彼はヴァジニア州の知事として戦局の指導に当るのだが，植民地の独立軍を援けたのはフランスの陸・海軍であり，殊にジェファスンは，La Fayette (1757-1834) と親交を持ち，ラ・ファイエット少将が指揮するフランス義勇軍はヴァジニア州に到来して，最後にヨークタウンの決戦においてウォシントンの軍隊と協力，英軍を破って独立を達成せしめたのである。ジェファスンとラ・ファイエットの交友は生涯にわたり，晩年の1824年，ラ・ファイエットがジェファスンをアメリカの私邸に訪れ，両者は手を取りあって再会を喜んだという話は有名である。

経済的な面で言えば，ヴァジニアのプランテイションの生産物――たばこ，小麦，家畜など――の販売先はフランスと仏領西インド諸島が多く，フランスとの関係は重要であった。特にジェファスンは，1784年5月に連合議会から通商交渉使節に任命され，8月6日に長女マーサを伴って初めてパリにつき，北部の鯨油，塩漬魚，サウス・カロライナの米，ヴァジニアのたばこなどのフランスの輸入促進，仏領西インド諸島の貿易自由化交渉をした。そして翌年その地で，フランクリンの

注(2)　ジェファスンは書物を愛し，晩年には6000冊の書を蔵していたが，アメリカの議院図書館がイギリス軍の手によって焼かれたため，自分の蔵書を議院図書館に売った。これが現在の議院図書館の核となっている（その目録は，*Catalogue of the Library of Thomas Jefferson*. Ed. E. Millicent Sowerby. Washington, 1952)。その量はA. スミスの蔵書数の倍であり，スミスの蔵書の著者の 48% はジェファスンの蔵書中に含まれているという (H. D. Adams, p. 70.)。スミスが純然たる学者であったこと，ロンドンやオクスフォドやスコットランドなど文化の中心にいたことを考えれば，大西洋をへだてた新興国の多忙な政治家であったジェファスンがスミスに倍する数の精選された書物を集めていたことは，驚嘆に値しよう。

(3)　*The Commonplace Book of Thomas Jefferson: A Repertory of his Ideas on Government*. With an introduction and notes by Gilbert Chinard. Baltimore: The John Hopkins Press, Paris: Les Presses Universitaires de France, 1926. ここには『法の精神』からの熱心な抜き書きが見られる。しかし後年ジェファスンはモンテスキューに対し強く反対するようになった。Benson, pp. 272-3,

(4)　ジェファスンの思想はルソーに近いのではないかと言われるが，ルソーの影響はほとんどないようだ。Gilbert Chinard は *Commonplace Book* で次のように言う。"最後の点で私はBecker氏に完全に同意しよう。すなわち，ルソーの影響は全く取るに足らず，またその生涯においてジェファスンが *Contrat Social* に何か注意を向けたことはなさそうだ。彼の蔵書の手書き目録の中にこの書を見つけることさえできない。" G. Chinard, Introduction to *The Commonplace Book*, p. 44.

あとをついで駐仏公使に任命され，フランスとの関係を深めるのである。

彼は，かつて *Notes on the State of Virginia* の質問を提出した François Marbois 侯，外相ヴェルジェンヌ，ラ・ファイエット，デュポン・ドゥ・ヌムール，コンドルセなどと親交を結び，フランスを知ることができた。当時のアメリカは独立直後で弱体であり，フランスは革命に突入するという混乱期であったが，ジェファスンはかつて「独立宣言」を起草した革命の先達として重んぜられ，またバスチューユ陥落の2カ月後に至るまで，彼自身革命の実態を見聞して共和主義的傾向を強め，あるいはフランスの文化に接するなど，僅か3年あまりとはいえこの滞仏経験は彼の人生に多大な影響をもたらしたのである。フランスにおいて彼は，ラ・ファイエットとつながり比較的保守的な立場にあったが，帰国後は，フランス革命の同調者・アメリカのジャコバンの指導者[(5)]と見なされるに至った。

任終えて帰国後，ジェファスンは再びパリへ行く希望を持っていたが，新憲法下の新政府の国務長官に就任を要請され，ここで財務長官ハミルトンと対立する運命となった。北部商・工・金融業資本の利益を代表し，強力な中央集権政府，国立銀行設立を主張するイギリスびいきの貴族主義者ハミルトンに対して，ジェファスンは南部プランターおよび農民の立場を代表し，地方分権論者，フランスびいきの共和主義者[(6)]として相対峙した。この対立は，やがて Federalists と Republicans の二大政党対立となり，アメリカの政治史における二大潮流を形成する。その間ジェファスンは，副大統領の時に XYZ 事件など対仏関係悪化の時期はあったが，ほぼ一貫して親仏的態度をとり，特に大統領だった1803年にはナポレオンから広大なルイジアナを購入したことによって，新興国アメリカは西部発展の基盤を得，ジェファスンの対仏外交は大きく評価されるに至ったのである。

そのほかにも，ジェファスンのフランス好みはいろいろな面に現れ，"料理法，ぶどう酒，建築，彫刻，絵画，音楽，特にフランス語など，フランスのものを生涯にわたって愛した。"[(7)] 特に建築設計はジェファスンの特技の一つだったが，フランスで新古典主義建築の強い影響を受け，パリ郊外の貴族の優雅な機能的な住宅のデザインに心を奪われ，帰国後は自宅 Monticello に大改造を加え

注(5) "われわれのあやしいデモクラットが，偉大なアメリカのジャコバンになった" 理由については，R. R. Palmer, "The Dubious Democrat: Thomas Jefferson in Bourbon France." *Political Science Quarterly*, (Sept. 1957)。吉武立雄訳，『アメリカーナ』(1958年10月)，75ページ。既訳については多少の修正がある。以下同じ。

(6) "彼の同時代人の多くは，彼は道徳も，'無宗教' も，政治哲学もフランス人から取りいれたと主張し，彼を極端な親仏家 (Francophile) だと考えた。そして Patrick Henry が言ったように，フランスの食物を大事にして '故郷の食物を捨てた' とさえ主張した。" Benson, p. 272.

ジェファスンは言う。"あのボナパルトというモンスターの手から逃がれたフランスは，再び地上で最も楽しい国になるに違いない。" (To William Short. Monticello, 1814, in *The Jeffersonian Cyclopedia*, ed. John P. Foley, I (N. Y.: Russell & Russell, 1900), 347.

フランスとの関係については，Kaplan, Lawrence Samuel. *Jefferson and France*. Diss. Yale Univ., 1952.

大道安次郎氏は，ジェファスンの根本的立場はあくまでアメリカ的，かつまたヴァジニア的であり，イギリス的なものとフランス的なものを綜合した立場だとしている。「トマス・ジェファスンの立場——スミス経済学のアメリカ導入史の一節——」，『人文論究』2巻5・6号 (1952年2月)。

(7) Benson, p. 271.

て，洗練されたものにしたのである。

2　ジェファスンとフランス経済学

農業者としてのジェファスン，農本主義者としてのジェファスンについては前回に述べたが，農業国であったアメリカにおいては農本主義は特に珍しいわけではなく，フランクリンは半重農主義者と言われたし[8]，ジェファスン主義者の John Taylor[9] なども，極端な農本主義を主張していた。

ジェファスンはその農本主義を，彼の生活体験や読書などから独自に形成したのであって，フランス重農主義者との交友によるものではない。また彼は渡仏以前にすでにフランス重農主義について知っていたはずだが，特にそれについての言及はない[10]。一方，彼が渡仏した1784年には，すでに重農主義は昔日の隆昌を失っていた。ケネが『経済表』を発表した1758年以来，économistesたちは，1763年の穀物取引の自由化など国の政策にまで大きな影響力を及ぼしたが，1769年には穀物取引の再統制が復活，1774年にチュルゴが大蔵大臣に就任するが，学派の衰運を挽回することはできなかった。チュルゴ自身が学派から離れたりして，70年代，80年代には学派は壊滅状態に近く，やがてフランス革命の大波に呑み込まれてしまったのである。

しかしジェファスンにとっては，滞仏中，ラ・ファイエットらの政治家のみならず，重農学派の

注(8)　S. Sherwood, *Tendencies in American Economic Thought*, p. 9. 久保芳和氏によると，"かれの重農学派的思想は，重農学派との接触以前にもかなりの程度において見出し得ることが判明した。だからこのような重農学派的素地を有するフランフリンは重農学派との接触によって，いよいよ強く且つ深く従来の見解を確信するに至ったのである。" しかし "経済表の理論を欠如している以上，真の意味での重農学派の影響を受けたとは言いがたい。……フランクリンが考察の対象とし，また理想と考えたアメリカの農民というのは，すでにみたように，独立自営の，比較的富裕な農民であって，みずから，土地耕作に従事する者，わたくしのいわゆる「プア・リチャード的人間」なのである。それ故に，ケネーの考えるが如き農業企業家とはその範疇を異にする。フランクリンが農業を重視するという点では重農学派に賛成しながら，該学派の経済表の理論の影響を受けなかった(いな，影響を受け得なかった)理由は，実に，経済表の理論が，かれの人間像→経済理論と相容れず，且つ当時のアメリカの現実に適用するには不適当であったという点に求められなければならない。" 久保芳和『フランクリン研究――その経済思想を中心として――』(関書院，1957)，pp. 144-6.

(9)　テイラ(1753-1824)は代表的なジェファスン主義者，農本主義者，農学者で，ヴァジニアのプランター出身。連邦上院議員を3期つとめたが，農業に最も興味を示し，権力分散，平等主義を主張，ジェファスンを擁護し，フェデラリストに対抗した。著書は *An Examination of the Late Proceedings in Congress Respecting the Official Conduct of the Secretary of the Treasury*, 1793. *Inquiry into the Principles and Tendencies of Certain Public Measures*, 1794. *An Inquiry into the Principles and Policy of the Government of the United States*, 1814. *Construction Construed and Constitutions Vindicated*, 1820. *Tyranny Unmasked*, 1822. テイラについては，Saul K. Padover, *Genius of America* (N. Y.: McGraw-Hill, 1960). 中屋健一訳編『アメリカ思想を形成した人たち』(有信堂，1961)，pp. 107-115.

(10)　"初期においてジェファスンと重農学派を結びつける直接の証拠がないことは明白だ。国務長官になる前には，重農学派やÉconomistes についてこれといった言及はない。何か明白な重農主義的理論が表明されたこともない。1783年の彼の蔵書の中には主な重農主義の著作があるが，彼がそれを用いたという証拠はない。彼が当時持っていたと今日わかっている本には，何も書き込みがないのだ。" Cragan, p. 295.

ジェファンスンが重農学派から受けた影響は決して小さくないと考えるものに，例えば，服部哲郎「ジェファスンにおける所有権思想の『革命』」，「史淵」(九州史学会)，第50輯（1951年4月）がある。

デュポンら経済学者との交友が大きな収穫であった。

ジェファスンが特に尊敬を示した人に，Antoine Louis Claude Destutt de Tracy (1754-1836) がいる。彼は感覚論の哲学者で，ロック，コンディヤックの影響を受け，唯物論的立場から感覚・記憶・判断・推理などの心理作用を分析し，実験心理学的な方法によって綜合，観念の発生および発展をあとづけて，これを観念学 (idéologie) と称し精神科学の基礎とした。著書に *Observation sur le système actuel d'instruction publique*, 1798. *Eléments d'idéologie*, 1801-15. *Grammaire générale*, 1803. *Logique*, 1805. *Traité de la volonté et de ses effets*, 1815. などがあり，革命直前の三部会では貴族の代表として参加したが，のちに政界からは退いて，哲学，社会学，経済学，数学，自然科学など広範囲の研究を行ったのである。ジェファスンは，ラ・ファイエットを通じてトゥラスィを知ったようである。

彼の主著とみなしうるものに，モンテスキューの『法の精神』に対する批評の *Commentaire sur l'esprit des lois* (1819) がある。ここで彼は，社会の進歩は法律制度の改革だけでなく，経済的・社会的改革が重要だと主張したが，これを書いた時，フランスで出版するのは危険だと考え，これを英訳し匿名でアメリカで出版するようジェファスンに依頼した。ジェファスンはこれを読んで，有効なモンテスキュー批判であり“今日最も価値ある政治的著作”と高い評価を与えたのである。(11) 彼は William Duane と共にこれを訳し，*A Commentary and Review of Montesquieu's Spirit of Laws* (1811) として出版，(12) ジェファスンはフランス人を装ってこれに“author's preface”を書いた。この書はジェファスンの意見と甚だ共通点が多いので，William and Mary 大学のテキストに用いられたし，ジェファスンが著者ではないかと疑うフランス人もいたほどである。(デュポンまでがこれをジェファスンの著だと信じ，フランス語に訳そうとした。) ナポレオンの失脚後，トゥラスィは自分が著者であることを明らかにした。(13) 1817年にはフランス版が出ている。

トゥラスィは1823年にフランスで *Traité d'économie politique* を発表したが，これは *Eléments d'idéologie* (1801-15) の一部をなすもので，彼の観念学体系の一部に過ぎない。内容はスミス，セーの所論に近く，生産・分配・消費に分かれ，効用価値論に傾斜し，次のようなものである。

社会について

生産，もしくはわれわれの富の形成について

価値，もしくは効用の尺度について

注(11) Merrill D. Peterson, *Thomas Jefferson and New Nation, a Biography* (N. Y.: Oxford Univ. Press, 1970), p. 948.

(12) *A Commentary and Review of Montesquieu's Spirit of Laws. Prepared for Press from the Original Manuscript, in the Hands of the Publisher. To which are Annexed, Observations on the Thirty-First Book, by the Late M. Condorcet: and Two Letters of Helvetius, on the Merits of the Same Work.* Philadelphia: William Duane, 1811. これは Research & Source Works Series 290 として 1969年に Burt Franklin でリプリントされた。

(13) Peterson. p. 948.

形の変化，もしくは製造について

場所の変化，もしくは商業について

貨幣について

われわれの富の分配について

人口について

われわれの富の使用，もしくは消費について

歳入，歳出，公債について

前の書のジェファスン訳が成功したので，彼は公刊前にジェファスンにこの書の英訳も依頼し，ジェファスンは，Duaneの拙い訳をもとに，1815年から16年にかけての冬毎日この訳を直し，訳は今度はトゥラスィの名を明らかにしてウォシントンで出版された。ジェファスンはこの書に高い評価を与えており，1816年4月6日 Joseph Milligan 宛の手紙で次のように言っている。

"今予告されているトゥラスィ議員の著作は，経済学の先人たちの英知を集め，以後の経験を生かし，議論を深め，主題を更に熟考したものである。それは，重要な特色において確かに際出っている。すなわち，他のいかなる書物よりも優れた説得的な論理，人の心を捕えて離さぬ思想，読者の頭にその思想を常に生々しく甦らせる手腕，いかなる結論に達しようともたじろがぬ真理探究心，一語たりとも動かしえぬ正確最上の語法……。"(14)

ジェファスンは，セーより新しいためかセーの書以上にこの書の水準は高いと考えていたらしい。"トゥラスィに対するジェファスンの熱の入れ方は，ほとんどとどまることがなかった。彼はトゥラスィのことを当代最大の政治・社会哲学者だと考えていた。……3カ月もの間，『政治経済学』の訳に1日4～5時間も費やした。"と言われている。(15)

20歳以上も年下の Jean Baptiste Say (1767-1832) の経済学に対しても，ジェファスンは高い評価を示した。セーからマルサスの『人口の原理』を贈られた時の1804年の手紙は前回に示したが，セーの *Traité d'Économie Politique*, 1803. を，スミスの『国富論』よりも好んだようである。例えば大統領職にあった1807年6月11日 John Norvell に宛てた手紙で，ロック，Sidney, Priestley, Chipman, フェデラリスト，Beccaria などの書を推薦したのち言う。

"もしあなたの政治的な探究がさらに進んで貨幣と商業の問題を考えるなら，セーの『政治経済学』が手に入らない時にはスミスの『国富論』が読むべき最良の書である。セーはスミスと同じ問題を同じ原理で扱っているのだが，短い範囲でずっとわかりやすい。"(16)

また1816年4月6日，Joseph Milligan に宛てた手紙で，『国富論』は優れており第一級の価値

注(14) *The Writings of Thomas Jefferson*, ed. A. A. Lipscomb and A. E. Bergh (Washington: The Thomas Jefferson Memorial Association, 1903), XIV, 461.

(15) Benson, p. 272.

(16) *The Writings of Thomas Jefferson*, XI, 223.

があることは認めるが冗長 (prolix) で退屈 (tedious) だと言ったあとで次のように続けている。

"フランスではジャン・バティスト・セーが，政治経済学の主題について非常に優れた著作を生み出すという功績を示した。彼の排列法は明快で，思想は明晰，文体は明瞭，そして問題全体が，スミスの著書の半分の分量におさまっている。"(17)

さらに晩年の1814年12月27日，Corre de Serra への手紙において言う。

"セー氏は驚くだろう。アダム・スミスとエコノミストによって金融の諸原理が展開された40年も後になって，またセー氏がわれわれに正確・ち密・明快なかたちでそうした諸原理を示した12年も後になって，われわれの国にはその諸原理についてこんなにも無知があろうとは。"(18)

その後ジェファスンはヴァジニア大学設立に精力を傾注し，ナポレオンの圧迫を受けたセーをヴァジニア大学教授に迎えようとしたが実現しなかった。セーが渡米していれば，その後のアメリカ経済学史は少なからず別の道をたどったことであろう。

3　チュルゴとの関係

重農学派の左翼で代表的な政治家であったチュルゴは，1781年に没したためにジェファスンは面識を得ていない。しかしジェファスンはチュルゴの著作に親しみ，しばしばチュルゴについて好意的に語っていた。

例えば，1790年5月30日，Thomas Mann Randolph, Jr. に宛てた手紙で読書について助言をし，次のように言う。

"政治経済学においては私はスミスの国富論が現存するものでは最上の書だと思う。政治学においては，モンテスキューの法の精神が一般に推薦される。事実それは，おびただしい政治上の真理を含んでいる。しかしほとんどそれと同数の政治的異説をも含んでいるのだ。だから読者は絶えず警戒していなければならない。……ロックの政府についての小さな書は，その議論の限りでは完全だ。理論から実践に下ってくると，フェデラリストより良い本はない。Burgh の政治についての労作も，特に De Lorme を読んだあとでは良いものです。ヒュームのいくつかの政治論も良い。チュルゴとフランスのエコノミストたちが書いた優れた理論書がいくつかあります。"(19)

また1813年11月29日デュポンに宛てた手紙で言う。

"チュルゴ著作集の最終巻をいただき，お礼申上げます。これで全巻が揃いました。彼の広汎な知性と，慈愛心にあふれ純粋な心のいずれを最も尊敬すべきか，言うことはできません。彼の

注(17) Ibid., XIV, 460.
(18) Ibid., XIV, 224.
(19) *The Papers of Thomas Jefferson*, xvi, ed. J. P. Boyd (Princeton: Princeton Univ. Press, 1961), 449.

『富の分配』において，他の一般的な著作において，彼のもっと小さな本の中で展開された偉大な原理において，われわれは彼の知性の巨人の如き大きさを讃嘆します。しかしその知性が妨害され，悩まされ，中傷され，そしてそのあらゆる力を地方行政の些事に用いるよう強いられるのを見る時，われわれはヘラクレスが牛車の車輪を動かすのに肩入れをしているのを見る思いで，残念です。彼の一般書のみならず専門書の中で彼が確立した健全な諸原理は，悪政に苦しむ人にとっては価値ある遺産であり，地方的な限界を越えて人類という大集団に広がるであろう。[20]"

そしてジェファスンの邸宅 Monticello の入口のホールには，玄関を中心に四つの胸像が並べられており，それは，ジェファスン自身，政敵であったハミルトン，そしてフランスのヴォルテールとチュルゴであった。

このようにジェファスンは，チュルゴを尊敬し，その著作に親しんでいたが，ジェファスンの晩年には重農学派の影響は薄らいでいく（たとえば Tracy, *A Treartise on Political Economy* 〔1817〕への序文）し，初期にも何か有形の影響を受けたという証拠はなさそうである。

4　デュポン・ドゥ・ヌムールとの関係

1774-6年にかけてチュルゴの経済顧問であった Pierre Samuel Du Pont de Nemours (1739-1817) との間に，ジェファスンは滞仏中親密な関係を結んだ。彼はケネの弟子で，すでに63年には *Réflexion sur la richesse de l'état* を書いてケネやミラボーに認められ，68年 *Physiocratie* と題してケネ著作集2巻を編集し，また雑誌 *Journal de l'Agriculture du Commerce et des Finances* (1765-6)；*Ephémérides du Citoyen* (68-77) の編者。著書は112冊もあり，重農学派の説を普及するのに大きな貢献をしている。アメリカとは特に縁が深く，83年には Vergennes の下にアメリカ独立を助ける対英交渉を推進，独立後は外交官としてアメリカに渡り，86年にイギリスとの通商条約締結を助けた。フランスに帰って Calonne の下で働き，ジェファスンがフランスへ来た時彼と親交を結んだのである。

フランス革命においては憲法議会に選ばれ，穏健派の立場で君主制を主張，アッシニア紙幣の発行に反対して急進派と対立し，1792年には投獄された。ロベスピエールの失脚で救われ元老院議員になったが，彼が所有する印刷所を略奪されるなど迫害され，99年には一族12人を連れてアメリカへ亡命したのである。その時ジェファスンは，副大統領で実権はなかったがこれを援助した。

1802年にはフランスへ帰って，元老院議員，パリ商業会議所書記，枢密院顧問官などになり，ジェファスン大統領がルイジィアナを購入する時はこれを助け，（この間9巻の *Œuvres de M. Turgot*

注(20) *Correspondence between Thomas Jefferson and Pierre Samuel du Pont de Nemours, 1798-1817*, ed. D. Malone (1930; rpt. N. Y.: Da Capo Press, 1970), pp. 145-6.

〔1808-11〕を編集している）15年再度アメリカに渡り，デラウェア州で没した。

彼が最初にアメリカへ行った時は，フェデラリストの政権下で親仏的ではなかったが，デュポンはその地で自由を見出した。単なる政治的亡命ではなく，デュポンはアメリカで富を得ることを前から考えていたようであり，長男 Victor Marie (1767-1827) はアメリカに帰化してニュー・ヨークで商事会社を経営，フィラデルフィアでは合州国銀行の重役になっているし，次男 Eleuthère Irénée (1771-1834) も帰化しデラウェア州 Wilmington に 1802年火薬工場を設立，これが後に発展して，アメリカ最大の化学コンツェルン，デュポン財閥となったのである。

ジェファスンとデュポンの交友は，ジェファスンの死まで30年以上も続き，その間に交わされた両者の手紙は，ジェファスンが保存していたために今日も読むことができる。(21)（デュポン発はジェファスン発の約2倍）。デュポンはジェファスンより4歳年長で，アメリカの「独立宣言」の年にはすでに経済学者として著名であったが，それだけではなく広い見識を有し，ジェファスンは彼にアメリカの国民教育制度について立案を依頼したこともある。多くの共通した思想を抱き，しかもアメリカの政界と実業界にそれぞれ巨大な影響を与えた2人の多彩な文通は，今日読んでも誠に興味深い。

デュポンが最初に亡命した時ジェファスンは助言を与えたので，2人の書簡集は渡米についての問題から始まり，教育，政治，ルイジアナ購入，外交問題，ジェファスンの鋤改良に対するフランス農業協会の授賞，ジェファスンの心境，アメリカの経済問題，課税問題，ラテン・アメリカ共和国構想，そこにおける政府のあり方，人民の自治能力などを論じている。たとえば物品税について，デュポンに反対し，ジェファスンは，1811年4月15日に次のように書いている。

"われわれは輸入税の方がましだと考えています。なぜかというと，輸入税は専ら富者にかかるものだからです。……事実，わが国の貧しい人は，自分自身の農場や家の中で，あるいは合州国内で作られるもの以外は，何も使っておりませんし，塩税を除けば連邦政府にびた一文税を払ってはおりません。またわれわれは，やらなくてはならないあの工業に取りかかっても，貧しい人は1セントも払うことはないでしょう。われわれの歳入が一度公債の償却によって解放され，その余剰分が運河・道路・学校などにふり向けられるようになったとすれば，農民は，自分の稼ぎの中から1セントの税もさくことを要求されずに，富める者だけの負担によって，政府が維持され，子供が教育を受け，国土が楽園のように見えるのを目にすることでしょう。われわれが現

注(21) 彼とジェファスンの間の書簡は Dumas Malone の手によって編集され，デュポンの仏文は Linwood Lehmanによって英文に翻訳されて，*Correspondence between Thomas Jefferson and Pierre Samuel du Pont de Nemours, 1798-1817* (Boston and New York, 1930) として出版された。ついで John Hopkins大学教授 Gilbert Chinard の手で編集され，The John Hopkins Studies in International Thought として，*The Correspondence of Jefferson and Du Pont de Nemours* (Baltimore: John Hopkins Press, 1931) の書名で出版された。この書の巻頭にある編者の序文 "Jefferson and the Physiocrats" は，Malone版のリプリント(Linwood Lehman. N. Y.: Da Capo Press, 1970) にも付録として付されている。

在進んでいる道を行けば，この目的にまっすぐ行きつきます。"[22]

アメリカの経済について，デュポンはアメリカの工業化によってその国民性は一変し，政府の基礎はゆるぎ，輸入関税が大きな部分を占める連邦政府収入を恒久的に減少せしめるであろう，新税が間接税なら経済的に有害であるといったのに対して，ジェファスンは，抽象的な課税理論を排し，国民が容易に負担しうるものを採用すべきであり，またアメリカが工業化を進めても，長期の人口増加は輸出入量の下降を防ぎ，連邦収入を確保すると考えた。ここでは，ジェファスンがアメリカの工業化を認めている（贅沢品の生産を除くが）こと，富者のみが税を負担すべきだと主張したことが重要である。

このような経済論のみならず政治論においても，両者はかなり意見を異にしていた。マロウン版『往復書簡集』の序論は，結びに，"細部において意見を異にしようとも，ジェファスンとデュポンは革命前からの信念を持ち続け，人類はたとえ完全にはなり得ないにしても無限に進歩しうるものだと信じ続けた。……彼らの30年以上にわたる友情は，対等な人間の，そして同じ政治的信条に献身した人の，結びつきであった。"[23] と述べているが，実際には両者の政治的信条は異なる。たとえばジェファスンは，先の手紙で続ける。

"政治的実験のもう一つの分野が，われわれの隣国，スペイン領アメリカで始まろうとしている。私は，聖職者や国王たちが彼ら人民を沈めてしまった堕落した無知の状態が，自らの権利を維持する能力を，いやその権利を知る能力さえも，彼らから失わせてしまったのではないか，しかもその生活状態を少しでも改善しようとすれば，おびただしい血が流されるだろうと，私は心を痛めております。新しい支配者たちが，無知という大きな障害物を取り去って，教育と知識の普及という救済策を押し進めようと誠実な気持で力をつくしたとしても，人民は，やはり次の世代がやってくるまでは危険にさらされていることでしょう。そしてその間にどんなことが起こるかを予言することはできませんし，あなたも私もそれをこの眼で確かめるまで生きてはいないでしょう。"[24] デュポン宛1816年4月24日付の手紙——

"われわれ合州国民は，御承知のように，憲法上も良心の上でもデモクラートです。われわれは，次のように考えます。社会は，人間が本来そなえている自然の欲求の一つです。つまり人間には，同じ欲求をもっている他の人々と共同することによってその欲求を果す能力と資質が賦与されているのですから，その能力を発揮することによって人間が社会状態を招来した場合，社会は人間の獲得物の一つであるわけです。ですから，人間は社会を招来する際に協力したすべての人々と実際に手をたずさえて，その社会を規制し支配する権利をもっております。また，その人

注(22) *Correspondence between Thomas Jefferson and Pierre Samuel du Pont de Nemours*, ed. D. Malone, pp. 133. ソール・K・パドーヴァ編『ジェファソンの民主主義思想』，富田虎男訳(有信堂，1961)，p. 86. に訳がある。

(23) Ibid., p. XXV.

(24) Ibid., p. 134. 富田訳，前掲書，p. 181.

間が，協力した人々を社会の用益や管理から除外できないのと同様に，かれらもその人間を除外できないわけです。

社会を構成している個々人の集団にとって，その個々人がなしうるすべての正当な権利の行使は，個々人自身が各個に保留しておく方がより安全であり，また個々人がなしえない権利は，代理人を指名してこれに委任し，しかも代理人が不誠実な行為をとる場合には，直ちにその個々人自身によって免職させることができるようにしておく方がより安全であることは，経験が証明してきた通りだと思います。そこでわが国の場合，人民（それは社会を構成している個々人の集団の意味ですが）は，日常の生活の上で生ずる事実を判断する能力をもっておりますから，陪審員の名で，事実についての判事の役目を保持してきたわけです。しかし，人民は，通常の水準以上の知性を要する事物管理の資格はありませんが，人間の性格については有能な判事なのですから，管理するため代表を選ぶわけです。その代表のあるものは，人民自身によって直接に，他のものは，人民によって選ばれた選挙人によって選ばれるのです。……

あなたも私も，人民をわが子とみなし，親のような愛情をもって愛しているという点では同じです。しかし，あなたの場合は，乳母がいないと安んじてほっておけない幼児として人民を愛しておられますが，私の場合は，自由に自治をまかせておける成人として愛している点が異なっています。

私は，あなたと共に次のことを信じます。道徳・同情心・寛大さは人間を構成する内的な要素であること。また人間構成の内的要素には，力とは依存関係のない権利が存在していること。財産に対する権利は，われわれの自然の欲求とその欲求を満足させるためにわれわれに賦与されている諸手段にもとづいており，われわれがこれらの諸手段によって，他の分別のある人間がもっている同様の権利を侵すことなく獲得するものに対する権利であること。いかなる人にも，自らの天性の一部となっている感覚的な満足のために自分の能力を無邪気に用いて他人を妨害する権利はないこと。正義は社会の基本法であること。多数は，個人に不当な圧迫を加えるならば，罪を犯しているのであって，多数の力を悪用しているし，最強者の法則にもとづいて行動することによって，社会の基礎を破壊していること。共和国の本質をなすものは，市民の力と権限の及ぶ範囲内のことがらにおける市民の個々人としての行動，および他のすべてのことがらについて市民が直接に選び，市民自身が解任できる代表者を通じて，市民がとる行動であること。すべての政府は，この原理がその組織のなかでしめる割合が多ければ多いほどより共和的であるし，少なければ少ないほど共和的でなくなること。代表制による政府は，ほかのどんな形態の政府よりもその支配する国土の広さをさらにひろげることができること。[25]"

× × ×

注(25) Ibid., pp. 181-5, 富田訳，前掲書，pp. 10, 16-7.

ジェファスンと重農学派の間には，特にデュポンを通じて人間的なつながりがあるばかりでなく，いくつかの共通する思想があったことは疑いない[26]。特に自然法思想，自由主義，農業重視などはその著しいものである。また，ジェファスンが重農学派をアメリカへ紹介した功績も大きい。だが両者の間にはいくつかの重要な相違があり[27]，それは次のようになる。

	Physiocrats	Jefferson
経済理論	経済表	な　し
経済政策	自由取引	国際分業
	単税	富者課税（現実的に）
	大農業促進	自営農創出
政治思想	啓蒙専制君主制	共和制，地方分権，美徳と才能の支配
目　　標	資本主義的大農業	自営農民の共和国

フランスの重農主義者たちが経済学の成立に貢献し，農業の資本主義化を進めたのに対して，ジ

注(26) "人間は何らかの社会を形成しなければ生存しえないこと，人間が住む社会と個人の間に敵対関係があると想定するのは不合理だということ，法律の数は最少限に抑えられるべきであり，法律の数が多いほど悪い政府だということ，教育は政府の機能であり近代においてはそれが自由と代議制政府の真の基礎であるということ，常備軍は危険であり良く組織された民兵はどんな場合にも《armée de métier》よりも望ましいこと，すべての宗教的信念あるいは宗教的信念がないことは許容されるのみならず尊重されるべきこと，人びとは発言においても著述においても自由であるべきこと，啓蒙された利己心は道徳の一つの基礎であるがどんな場合にも人間の行為を説明するというわけではなく人間にはもっと高い原理があること，大都市に大勢の人間が集合することは公的・私的道徳にとって危険となること，従って工業社会よりは農業社会の方が望ましく，すべての富のみならずすべての美徳も土から得られること，貿易の自然な流れにはできるだけ障壁を置かないこと――これらの諸原理は，ジェファスン的ディモクラスィのまさに核心ではないか？　しかしそのどれ一つとして，ジェファスンの演説や手紙から取ったものはない。ここに示したリストは，すべてDu Pont de Nemours とその師 Quesnay の引用からつくられたものなのだ。" G. Chinard, Introduction to *The Correspondence of Jefferson and Du Pont de Nemours*, pp. xi-xii. Chinard は続けて，"全く独自に，ジェファスンはいくつかの問題点についてフランスのエコノミストたちと同じ結論に達した。これらの結論は，ふつうの常識と判断力を用いて，当時すべての国の自由な思想家によって一般に承認されていた一群の非常に単純な諸原理からおそらく得られたものであろう。" と言っている。

Grampp によると，ジェファスンを重農学派とする説の代表はV. L. Parrington, *Main Currents in American Thought* (N. Y.: Harcourt, Brace and Co., 1927) とF. W. Hirst, *Life and Letters of Thomas Jefferson* (N. Y. : Macmillan, 1926)。また彼はジェファスンを "Commercial-agrarian と考えるものとして Joseph Dorfman を，完全な保護貿易論者として考える例として Friedrich List を，単税主義者と考える例として Henry George, "Jefferson and the Land Question" を，階級闘争説の先駆・社会主義の面を見るものとしてC. M. Wiltse, *The Jeffersonian Tradition in American Democracy* (Univ. of North Carolina Press, 1935) を，laissez faire の要素を強調するものとしてJoseph Spenglerを挙げ，それらがジェファスンの生涯のある時期には妥当したとしても，彼がそれらの説を生涯抱いたと言ったら誤りだと述べている。(in *Thomas Jefferson, a Profile*, ed. M. D. Peterson, pp. 136-7)

(27) Richard Hofstadter は言う。"18世紀のフランスの封建社会に合理的によく適合した学説は，分散した小土地所有農を持つアメリカの農業には合わなかった。土地所有者の収入に対する単税という考えは，この小土地所有農が到底賛成するところではない。……アメリカの農本主義学説は，社会の資本主義的部分が主に課税手段で農業を搾取しているという考えにもとづいていたのだ。……フランクリンもジェファスンも，公表された文書で重農学派を擁護したことは全くないし，重農学派の著作のアメリカ版を発行しようとしたこともないのは……特に意味深い。" "Parrington and the Jeffersonian Tradition," *Journal of the History of Ideas*, II No. 4 (Oct., 1941), 394.

ェファスンは，その反資本主義的理想からしても，この面の貢献はない。しかし重農学派がフランス革命の勃発によって完全に消滅しその役割を終えたのに対し，ジェファスンの農本主義は，現実に政治の責任者として種々の妥協[28]をせざるを得なかったとはいえ，アメリカ democracy の基盤となり，いわゆるヴァジニア王朝，共和党支配が続く中で長く影響力を及ぼした。それは単にアメリカ的というだけでなく，今日，彼の反中央集権的 libertarianism[29] の傾向は，将来のディモクラスィ[30]のあり方にも大きな示唆を与えることとなったのである。

（経済学部教授）

注 (28) たとえば，ジェファスンが大統領として農業のみならず製造業，商業，海運業も重視したことは前回に述べた。(69巻8号，30ページ) これをもって彼を重農学派から区別する考えもある。（たとえば Gilbert Chinard, *Thomas Jefferson, the Apostle of Americanism* 〔1929; The Univ. of Michigan Press, 1966〕, p. 471. 明石紀雄「ジェファソンの自然観——アメリカ啓蒙思想についての一考察——」，『同志社アメリカ研究』6号〔1970年3月〕, p. 45.）

(29) アナキズムから見た時の限界については，George Woodcock, *Anarchism, a History of Libertarian Ideas and Movements* (Victoria: Penguin Books, 1962), p. 47. 拙訳『アナキズム』，I （紀伊国屋書店，1968），p. 60. この語の意味については，同書の訳者序言参照。

(30) ディモクラスィの意味については，拙著『社会思想史論集』(長崎出版，1978)，II.